へ 13
3838
5

白縫

十九篇之上

集作者柳下亭種員

畫 梅蝶樓國貞

安政六己未
新刻發兌

しらぬひ譚 嗣編概略

廿八編 ふへ

若菜姫お牛を屠刹し刑部喬梓に湊の満汐辛き目みせんと計しも湊を塞ぐ捕手あらぬ鳥山豊後と不側の出會春の助手に謀略の蓋をもあらで皆嵜のありかしもあきさ緑林類は青の刈修羅女が敗北の吏

廿九編 ふへ

庁憲に痩て色ノあきさ白梅か嫉妬の怪談焼酎火に聞く又のきさ黒幕り亘滅にて雨車乃鳴物に驚きさ五月雨雲の夏心の書割貞行に折ふしさ剣の小柱と娘役の所作事妄養婦が乱行の怪を縁で引道具

三十編 ふへ

多門之助が怪猫退治は頼政の鵺に似て菖蒲にあらぬ石竹の妹くら常夏の傳花の御所に花を飾り偶居の梅津に實入の秋作あるは津見身の義烈節々に合する条に至て若菜姫の事に轉す

地本草紙問屋人形町通住吉町 [illegible]

しらぬひ譚
十九編上
種員作
国貞画
十九編下
柳
松下林
外題画 豊国画

廿編上
白縫譚
種員作
國貞画
廿編下
柳下松林

白縫 十九上巻 十七葉 香蝶樓豊國画

元祖慶子中村富十郎俳名ハ七十余ふて道成寺の所作事を勤しふ容色壮年と更ふ變らず伎藝も聊劣らねバ都鄙群集て見物せしとぞ豊國叟も齢ハ古稀ふ垂とすれど画的の艶罷さハ弱冠ふ弥増て挙世喝采なれども近来柳史の描筆を止られしかバ看官方一増翁の画たる策子を鳴望とぞ知由を僕が荒吏師の意ふ成細画の机上ふ押戻し十葉を強て求め彼京鹿子の文句ふ因らめでさんく樓木ふ鏤むるこゝろざしそれハ此巻中ふも傍妻白梅が嫉妬を見するさへ観涂の最中鱗形の組卒が何の恨ぞ有明の撞鐘つきそと引上させ中より現出蛇身の丈の廿尋余と云ふハ異て十楮の間ふ之を述

安政乙卯開端

柳下亭種員

白縫譚

種員作

國貞画

廿編下册

柳下文庫

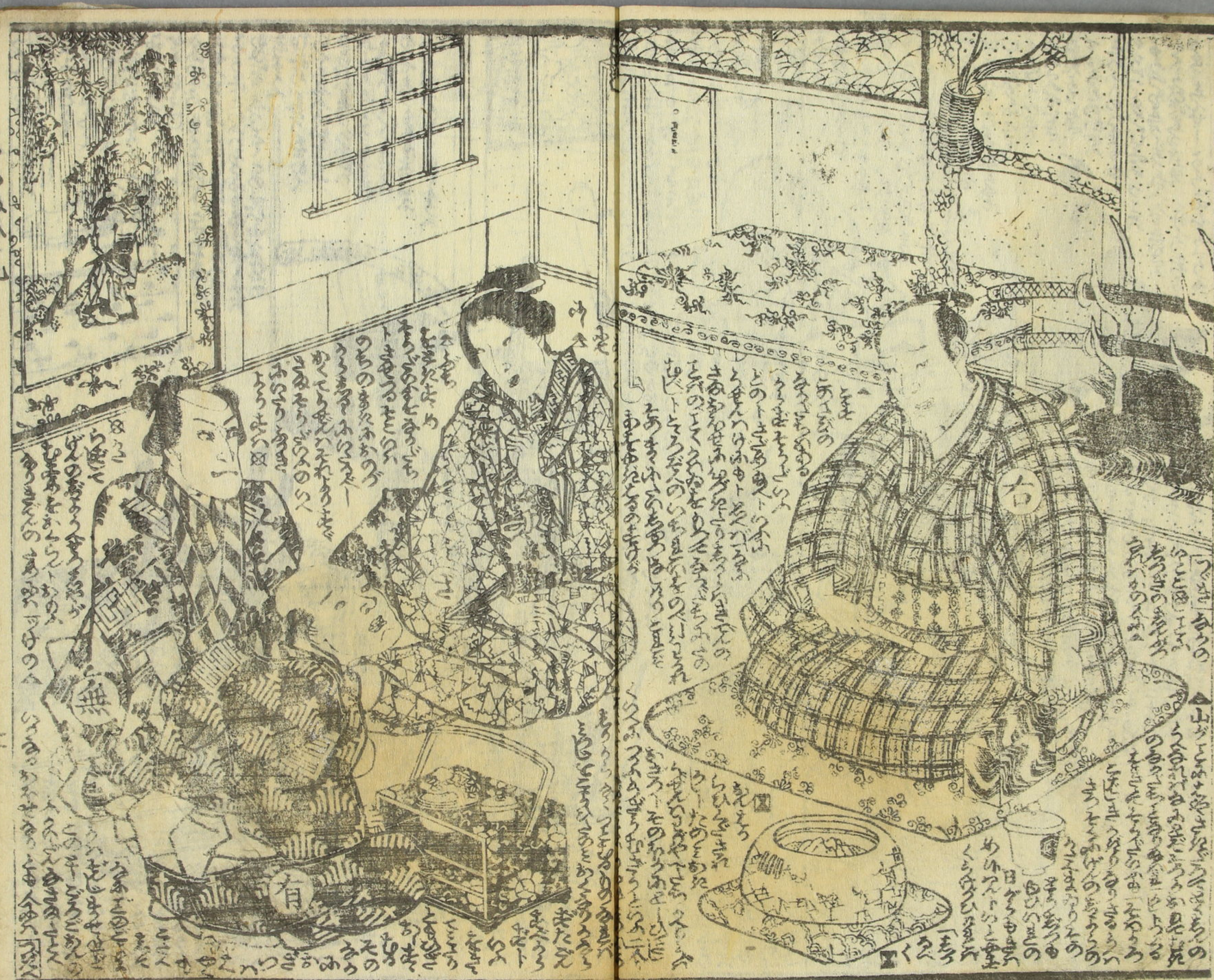
門 へ13
號 3838
巻 5

肥後國阿蘇大住
山賊の首領阿修羅丸

若菜嬢子

右
左

右
宋
右

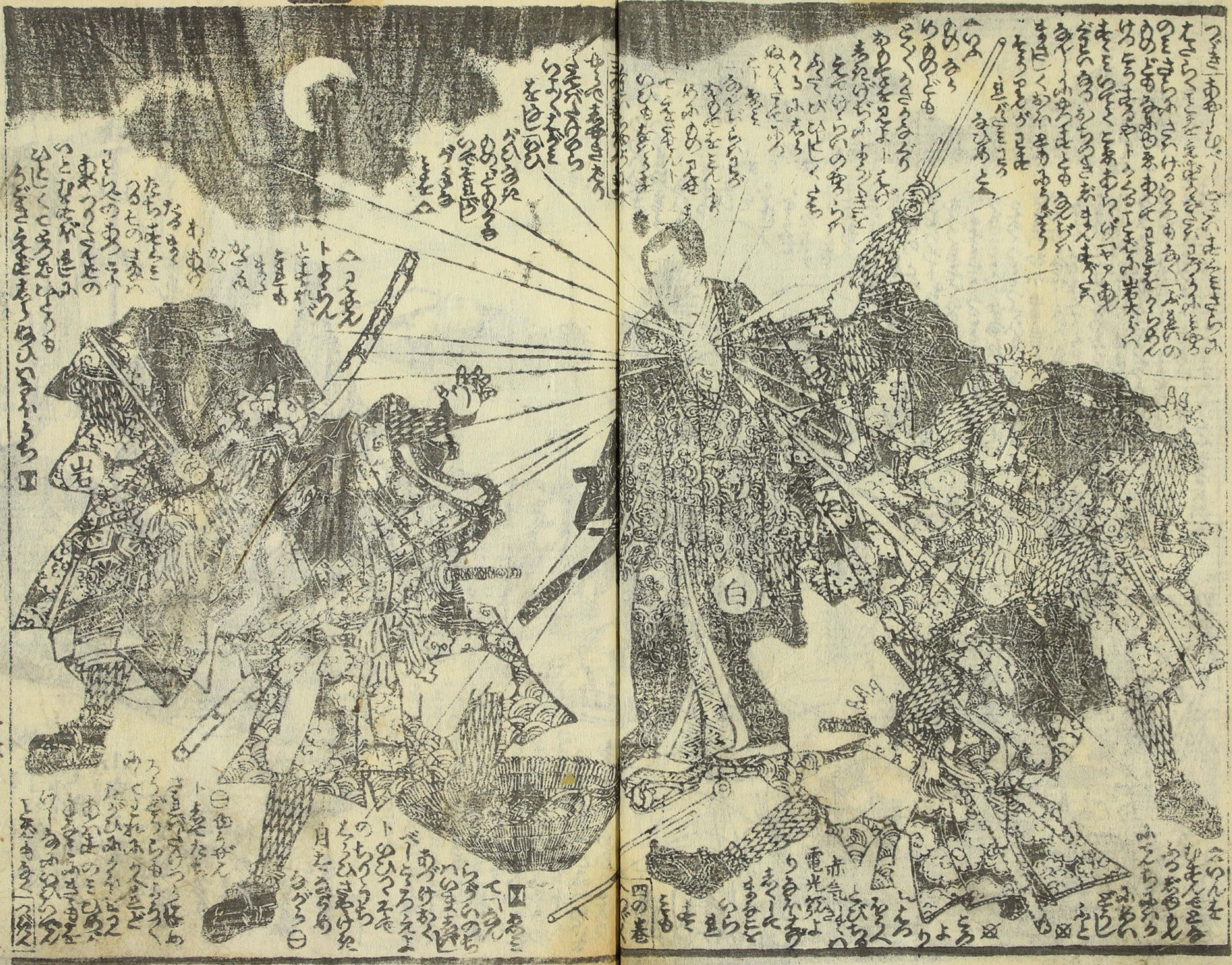

右
有
無

梅

上冊
豊國画
種員作
刑
白
戸

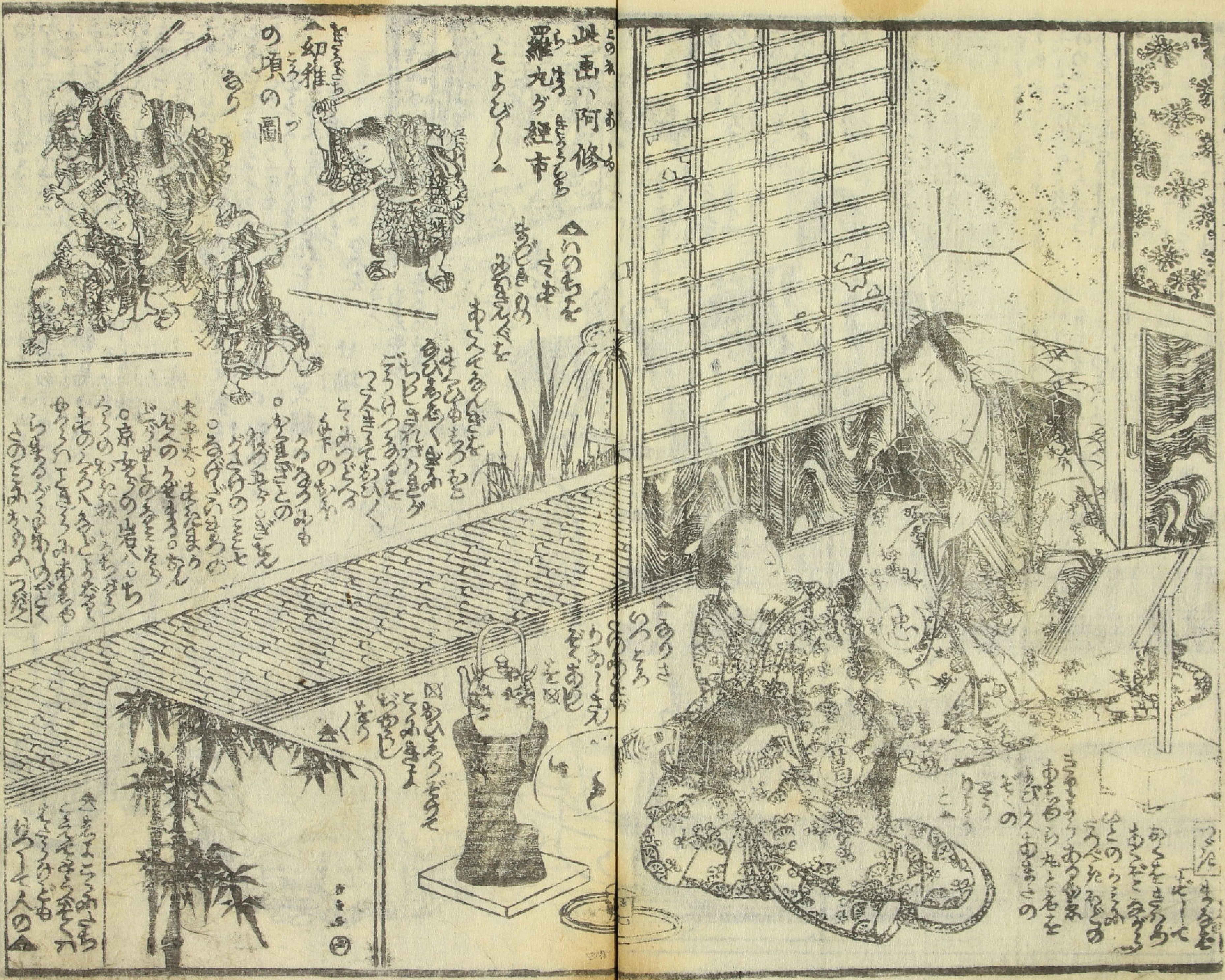
白
黒

白
山石


岩
白
赤気
電光
四の巻

此一丁ハ鷲津七郎島山の山塞に至りて叔父惟俊に逢図あり
後の巻に自らは走あるべし

大篠監物忠家主君
龍道寺高朝を諫諍
し肥前を退身なし
六十余年以前に在し
甚と見ゑぶ


此画ハ阿修羅丸が経市とよびし
幼稚の頃の図なり

新奈の小妻羅
勝鳥の黒八
阿蘇嶽の山塞に立
帰りて若菜
姫の動勢を
告る文解は
廿編に委し
阿
波
其
岩
沖
根
火
黒

先達に發兌せる此書の巻尾目録にも記せしごとく十八編より廿五編迄れ
山鹿玄之丞白梅等が事を読んと慨畧ハ草稿にもしるせしかど
莫逆友の告て曰忠臣藏十一段の内四段目より以下八段目ハ除て
五段目六段目の寂莫なるハ彼淨瑠璃中第一の魁役由良之助の
出ぬ場なればこそ足下が著述の不知火も一部の主とも唱べき若菜
姫が暫出ざれバ看官の不興となるべし其了簡して綴されよ斯許の
長物語此後編ハ弥肝要なりとも不怠慢なくと勘平意味で教示
されたと兼諾ぐ合点々々草紙満尾もそろそろ無不的
らと野猪より先へ逸散にかくし循三笠山伊達五郎が山田河内に五個
暦戦の夜鉄炮雨の震動雷電に死を青柳春之助に救へ場を

伊勢参
与賀吉
実ハ亀谷
多門之助
光行
傾城綾織
鳥山秋作
輝忠
豊国画

五拾両の黄金を入る財布の縞の横竪不離文で編つぎまでしたりと
胸裏を明白言上ハ此後とても拙作意お趣向を雲顔君子ヨ御
助言をたのん為願ハ御贔屓深編笠原千岸ら訪来のうふ在宿なる
哉と見苦き茅屋迄光臨なくとも書房へ告よるで尊意次第即時
案變愚存と御披露まするさへ益友が譬諭ふひける六段目の山崎
なうで是ハ今戸的八幡宮の真向へ住居を移しぬく間なの頃
よくなりるを

安政甲寅仲冬成稿

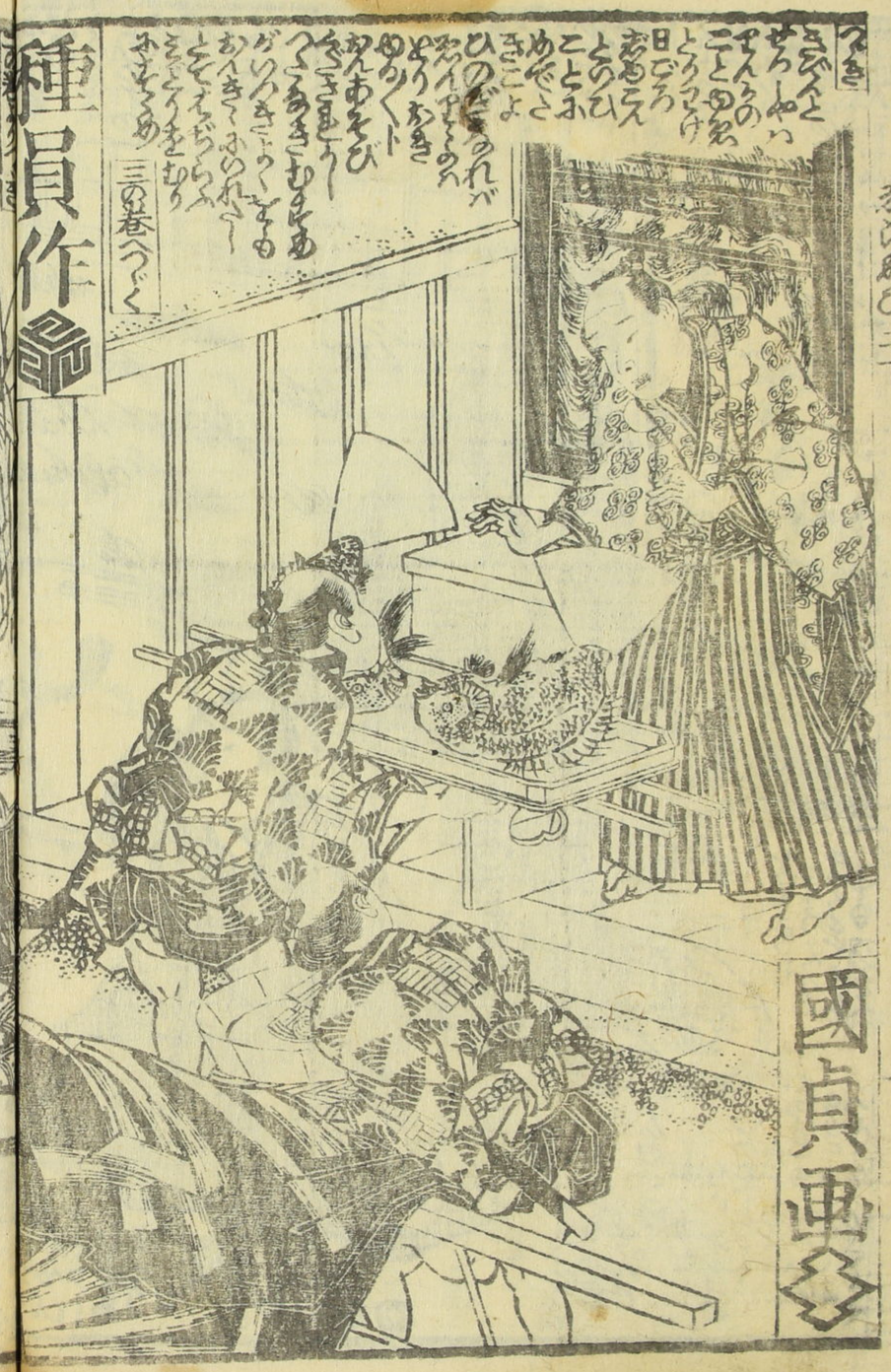
同 乙卯初春發販

柳下亭種員記

于棣素軒南窗試筆

宮城魚

岩
根


種員作
國貞画

梅

愚
梅

つゞき
風
火
岩
沖
其
若

阿修羅丸が
華若菜姫の
詐術に呆る

志らぬひ譚嗣出分概略

三十一編ハ菊地貞行赤坂山夏狩の饗宴に遊君田植の所作路次に菊を折取席上に縁をむすぶが糸巻ハ若菜姫の変形にて悪徒を懲して貞行との出合 三十二編に続て例の妖術に菊地をなやまし一味となるにより春の助小文治と初めて面を對せれど交戦の間にあれバ匆々にわかく分離此段に龍鷲津七郎をあらはして所謂そげしき立まはりありかくて話前にかへり太宰の後室毒死より矢部川原の拾遺猪助のりうときゑふの八ふあざむかれ苦界に沈む 三十三編 にハ八羽根平と塩塚川にて道外の立廻りを毛剃九右エ門太宰の家に入こむ下ごしらへにて小女郎と来楡軒さ三人のだんまり是より白梅病本復しふたゝび山鹿の家にかへ終に究罪におちいるのおもむきそれしふうの主 三十四編 ハ白梅非命に死しあざミ貞行に愛せられて春の助との乱行安養法師拷門にくるしむ又三笠山大阪にて危難をのがれ下の関にておさえにあふして鱗太夫か奸計をあばし 三十五編 ハ筑前にかへり玄之丞夫婦を殺しくらしのまゝとなり春の助にすくハれ鱗太夫に母をころされ不日山田河内のあだをうち五人切の大場を説 三十六編 より下ハ又追々に披露すべし

板元菊壽堂にかハりて技者 柳亭種彦記

地本繪草紙問屋 人形町通り 廣岡屋幸助梓

[illegible]